2006年度
東京外国語大学
総合文化研究所
活動報告

作家は語る

「『手触り』の復権にむけて」
6月30日　大岡 玲（作家）

「小説を書くということ」
1月31日　青野 聰（作家）

公開シンポジウム

「翻訳する、とは何か？」
1月25日　主催　総合文化研究所
都甲幸治　（早稲田大学）
野谷文昭　（早稲田大学）
沼野恭子　（東京外国語大学）
和田忠彦　（東京外国語大学）

国際シンポジウム

「甦るショスタコーヴィチ」
12月16日
主催　総合文化研究所、東京外国語大学
亀山郁夫　マナシール・ヤクーボフ
宮良哲也　新良貴好子　森田 稔
ロザムンド・バートレット
エリザベス・ウィルソン
中田朱美　千葉 潤　一柳富美子
ボリス・ガスパーロフ
ロザムンド・バートレット
梅津紀雄　森 泰彦　半谷史郎
工藤庸介

編集後記

今回の特集号は、「〈東〉と〈西〉のディアレクティク」、と題して組まれた。当初、渡辺雅司研究所長の構想は、「ユーラシア」を軸とする論考の特集であったが、「ユーラシア」が、「大ロシア主義」を連想させるのではという危惧から、敢えて、より広い視野を包括する枠組みとして、〈東〉と〈西〉のディアレクティク、とすることに帰着した経緯があった。「〈東〉と〈西〉のディアレクティク」という題目で、すぐに連想されたのが、19世紀半ばの、現在のグルジア共和国のトビリシ（当時はティフリスと呼ばれた）で戯曲や評論などの著作活動をしたアーホンドザーデ（一八一二―七八：ロシア、アゼルバイジャン側ではアーホンドフと呼ばれる）という人物のことである。当時、北方から逃避してきていたマルリンスキーなどのデカブリストや、自由主義に心酔したアルメニア人の知識人らが結集していたティフリスで、この人物は、オスマン帝国や、母国イラン（当時のペルシア）などのイスラム諸国の高官、知識人に向けて、「西洋」の息吹を伝え、民衆啓蒙の強力な手立てとして、アラビア文字のローマ字化という文字改革を唱導したことで知られている。アゼルバイジャン・トルコ語を常用語としつつ、ペルシア語、ロシア語を母語同様に操り、イスラム哲学に心酔する一人のムスリムであった彼は、現在でも、イラン側では、宗教勢力の狂信に対して民衆の啓蒙を訴えた最初期のイラン民族主義者として、アゼルバイジャン側ではアゼルバイジャン・トルコ語文学の創始者として、双方からの位置づけの対象になっている。アルメニア、アゼルバイジャンの二つの共和国の北部、黒海とカスピ海の中間点に位置し、「キリスト教文明」と「イスラム文明」とが共存した19世紀半ばのティフリスに生きた一人のコスモポリタンの残影に、「〈東〉と〈西〉のディアレクティク」の原風景を見る思いがする。

（藤井守男）

Trans-Cultural Studies No.10
総合文化研究 第 10 号

2007 年 3 月 15 日発行

責任編集　渡辺雅司　藤井守男

編集スタッフ　吉本秀之　大塚ちはや
住 岳夫　陶山大一郎
古川 哲　矢澤智生

発行　東京外国語大学 総合文化研究所
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1
電話　042-330-5409
Fax　042-330-5410
Web　http://www.tufs.ac.jp/common/fs/ics/
e-mail　ics@tufs.ac.jp

印刷（有）英工社
東京都府中市住吉町 1-78-34